

妻を失ってしばらくは心に開いた穴が埋まらなかつた。

終末期を生きる術としてここを選んだが、ここにはもう一つの人生があった

湯河原へゆうゆうの里 鈴木秀則様(82歳) 令和3年7月 一人入居

一貫して、成長産業を支える希少海外資源を扱う仕事に従事できました

大学は応用理学専攻で、卒研は「水素吸蔵合金の開発」。今でこそ自動車の脱炭素燃料として脚光を浴びるようになりましたが、当時はまだ早すぎました。卒業と同時にエレクトロニクス関連の希少資源を海外から輸入する専門商社で働き始めました。日本の次代の成長産業を支える上で必要な資源を調達することにやりがいを感じつつ、半導体の分野で業績を伸ばしました。1975年には半導体不況にもかかわらず、有志3人で新たな貿易商社を創業。海外で委託製造した半導体シリコンを輸入して日本で販売しました。2003



あり日の奥様とイタリアにて

年にはCADで自営業を始めました。海外の大手カーボンメーカーと契約して、カーボン素材のさまざまな部品を設計する仕事です。その部品がPHEV車に量産で採用されたこともありました。

出会った頃の妻は、色白で日焼けが大嫌いなのに釣りに付き合ってくれました

会社を作った頃、夏の二ヶ月間社員の保養所として、吉浜海岸の近くに家を借りていました。その家の親戚で料理の手伝いに来ていたのが妻でした。僕は釣りの好きで、釣りばかりやっています。ある時、皆で熱海の火花に行こうとなったのですが、皆が気を遣って結局二人になってしまったんです。それをきっかけに釣りに誘うとついてきてくれました。色白で日焼けするのは大嫌いなはずですから、相当無理していたことでしょう。それだけ自分を思ってくれていると思うと、「この人は大事にしなきゃ」って気持ちになりました。妻との一番の思い出は、二人で行った海外旅行です。イタリアを皮切りに毎年、行き先を変えて15年で15カ国ほどに。美術館や教会巡りが多かったです。僕はイタリアに行つてから絵を描き始めました。スケッチを見た妻が美

術協会の公募展への応募を勧めてくれたお陰で、僕は町長賞をいただき、絵は生涯の趣味になりました。

妻を失つてようやくたどり着いた一人で生きる決意。独居のリスクはホーム入居で解決

2014年のこと、夕飯の支度をしていた妻が「頭が痛い」と言うなり倒れました。すぐに救急搬送したのですが、意識が戻ることはありませんでした。僕は毎日病院に通いました。私や子供達が話しかけると妻の表情が変わります。やつぱり家族を感じているって思いました。そうやって820日が経った朝方に、妻は僕の腕の中で逝きました。亡くなってからは、心に穴が開いたようで2、3年はどうしようもなかつた。テーブルのいつもの席に妻がいなくて、なんとなくか食事を作り、スポーツジムに行ったり、絵とか音楽とか好きなことに没頭しようとした。ようやく一人でも生きてやると決意した時に、近所のお年寄りが孤独死で見つかりショックでした。結局、独居のリスクを避けるためホーム入居という選択をしました。妻の生まれたこの町やへゆうの里」はよく知っていたし、食堂の雰囲気良かった。自立入



大作を制作中の鈴木様

居にふさわしい食堂でした。それに診療所と介護棟がある安心があります。

絵画と写真と。そして、この里でもう一つの人生を過ごす実感

入居してから初めて入った露天風呂で、写真サークルの世話人という方に出会い誘われて入会。以来、写真技術からコンテストの攻め方までご教示いただきながら、会の事務局もやらせていただきました。会員数も多く人と巡り合えるのが嬉しいです。食堂で朝食をいただき、すぐ近くのアトリエに行き、頻りに訪ねてくれる絵描きの友人と歓談し、近くのカフェでランチをしたり、午後は秋に出品予定の絵画制作に取り組んだり。夕方は、里に戻って温泉大浴場に行つてから、食堂で写真仲間や新入居の夫妻と夕食のテーブルを囲みます。また、最近この町の美術協会の会長に任命され、忙しくしています。妻亡き後、僕は終末期を生きる術としてここを選んだが「ここにはもう一つの人生があった」と実感しています。